

先生の学私 コラム



物理の教師を目指す学生に、授業の導入部分を毎週発表させている。柔軟な発想から繰り出す内容に感心することや、びっくりすることもしばしばあり、心地よい時間を過ごしている。

音波の単元のところで、学生がスマートフォンを使って、「この音は聞こえますか」と、ピーと高い音を出した。「次にこの音はどうですか」と言って鳴らした時に、全員が聞こえると言っているのに、実は自分だけ聞こえなかった。一般に、

人が聞こえる音を可聴音といい、その音の高さは、およそ二〇から二万ヘルツの範囲になっている。個人差もあるのですが、多少のずれもあるが、犬や猫はもっと高い六万ヘルツくらいまでの音を聞き分けている。次に、「先生は、この音聞こえますか」と私

だけをターゲットに繰り返し試してきた。聞こえてもいないのに、二回目のときに聞こえたと言った終わらせると「エッ先生は何歳ですか」「六三だけど」「ジャーしようがないかな」と一応納得してくれた。

人は歳をとることによって、だんだん高音部が聞き取り難くなる。六〇歳代になると急に、三千ヘルツより高い音は、加齢現象により聞こえ難くなるようだ。鼓膜の奥にある蝸牛という部分の細胞が、老化して反応が鈍くなったことが原因となっている。

自分では、まだまだ若いつもりで頑張っていたのに、こんな形で年齢を知らされるとは、思ってもいなかった。それでも気づかれないうようにと嘘をついてしまった自分が情けない。何時までも若いつもりでいても、こんな落とし穴がある。あんまり頑張りすぎないこともときには許してはどうか。

頑張ろうか？

日常のリクツへ理科とふだんをつなぐ

①

小岩利夫 日本学園中高 副校長